第３学年　国語科　学習指導案 [redacted]

「奥の細道」の冒頭「月日は」には芭蕉の人生観が凝縮されている。「死を覚悟してまでも旅に出た」芭蕉のものの見方・考え方について多面的に読み取り，芭蕉の生き方に対する自分の考えをもたせていきたい。そのために，次の手立てを講じる。

① 「月日は」及び「平泉」を全員で読んだ後，同じ「おくのほそ道」の他の章段を個人で選んで読む過程を設ける。

② 個人で読み取ったことを，同じ章段を選んだグループ内で交流（※１）する。

③ 交流によってグループで共有したものを学級全体で発表し合う。

④ ②③の過程で新たに気付いたことも取り入れながら，芭蕉の生き方について文章にする。

これにより，生徒は旅に寄せる芭蕉のものの見方・考え方に対する理解を深め，芭蕉の生き方について自分の考えをもち，まとめることができる。

※１ここでいう「交流」とは，生徒が個人で読み取った芭蕉の心情を，根拠とした叙述を基に理由付けをして説明し合うことである。「交流」することで，自分の読み取った心情を確かめたり，複数の根拠に気が付いたり，同じ根拠を基にしていても理由付けが違うために読み取った心情が異なることに気付いたりして，読みを深めていくことができる。

１　単元名

「芭蕉の旅への思いを考えよう」

教材　教科書教材「おくのほそ道」（「月日は」，「平泉」）

教科書以外の四つの章段（「旅立ち」「遊行柳」「白川の関」「大垣」）

２　単元の目標

○ 「おくのほそ道」を，対句や漢語の多用による調子のよさを感じながら進んで音読したり様々な見方で読み味わうことを楽しんだりしている。（関心・意欲・態度）

○ 「おくのほそ道」を教科書教材と他の章段と重ねて読み（※），文章の叙述に表れた作者のものの見方・考え方を理解し，それに対する自分の考えをもつことができる。（読むこと）

○ 歴史的背景や作者の当時の状況などに注意して読み，その世界に親しんでいる。（言語についての知識・理解・技能）

※ ここでいう「重ねて読み（む）」とは，「おくのほそ道」を教科書教材だけでなく，他の章段を併せて読むことである。教科書教材で読み取った作者のものの見方や考え方，心情が他の章段においても表れているのかどうか，どのように叙述に表れているのかを読むことで，作者の旅への思いや生き方について考えを広げたり深めたりすることができる。

３　単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・進んで古文を読み，様々な見方で読み味わって自分の意見をもとうとしている。	・古文を読んで，文章に表れているものの見方や考え方の違いを整理し，人間，社会，自然などについて自分の意見をもっている。 ・同じ作品の複数の文章を重ねて読み，自分の考えを深めている。	・歴史的背景などに注意して古文を読み，その世界に親しんでいる。

４　単元と指導構想

（１）単元のとらえについて

本単元では，「おくのほそ道」を教材として扱う。「和歌の世界」に続く三年生二つ目の古典教材であると同時に，中学三年間の最後の古典教材となる。「おくのほそ道」は，松尾芭蕉が元禄時代に著した紀行文であり，日本の古典における紀行文の代表とも言える作品である。紀行文は三年間の学習の中で唯一の教材であり，極めて貴重である。しかし紀行文とはいえ，作品中に多数の俳句が詠み込まれている俳文の要素や，数々の虚構の部分から成る文学的作品としての要素もある。「旅行の行程をたどるように，体験した内容を記した文」という一般的な紀行文とは，内容的にも形式的にもやや異なっている。

本単元では，次のような学習が可能になる。

① 既習の「俳句の世界」の学習内容を復習し，俳句の鑑賞に活用する学習

② 一般的な紀行文に近い「曾良旅日記」と読み比べることで，「おくのほそ道」に文学としてのすばらしさがあることに気付く学習

③ 教科書以外の章段の文章や俳句の叙述や表現から，芭蕉の旅や古人への思い，人生観について読み深める学習

本単元では主に③を中心に学習を進める。①については，③の中で扱うことが可能であり，またより妥当である。「俳句の世界」での俳句は単独で提示されているため，俳句が作られた背景が分からなかった。そのため技法や表現の細部に着目して読んだ上で，想像力を働かせて鑑賞した。しかし，「おくのほそ道」は，作品中に多数の俳句が詠み込まれている形式なのだから，俳句が創られた背景が本文から分かる。むしろ本文と俳句がどのように関連しているのか，本文での作者の心情が俳句にどのように凝縮されているか，どう表現されているのかを読むべきであると考えた。

②については，単元の終わりに，生徒にとって身近な「越後路」や既習の「平泉」を例に，教師が紹介するという形で扱う。生徒の興味をひく学習ではあるが，後で述べる生徒の実態から，本単元では時間をかけて学習することはしない。

（２）生徒の実態と単元のかかわり

一部の生徒は学習意欲にむらがあり，内容や時間帯によって集中できない場面もある。しかし，学力の高い女子が学習をリードしており，学級全体としての課題に対する取組は概ね良好である。男女の仲も良く，ペア学習やグループ学習，フリーなどの形態で自由に話し合える雰囲気がある。

しかし，聞き合って考えを広げることはできても，互いの意見に対して質問や意見を出しながら読みを深めていくことは難しい。その原因は次の二点である。一つは，根拠や理由付けを明らかにして考えを述べる論理的思考の経験が少なく，多くの生徒が苦手としていることだ。そのため自分の考えが他の生徒と違っていても，違いがどこから生じているかが分からず議論できない。もう一つは，話合いのスキルが身に付いていないことだ。司会を立てても，発表者に対して言いたいことを確かめたり，不足している情報を質問して引き出したりするスキルが不足しているため，深まらない。

そこで論説文「平和を築く」や「課題作文の書き方」の取り立て学習等で，三角ロジック（＊２）を用いて自分の考えを説明する学習を行った。叙述を根拠として挙げ，自分の考えとどう結びつくのか理由付けることにより，議論が成立した。まだ習熟には至っていない生徒が多いが，その有効性について生徒は十分理解している。また話合いのスキルについては，国語以外の学活や総合的な学習の時間においても，話合い活動を重視し，司会，発表，記録の役割をポイントを示した上で全員に経験させるようにしている。

＜注＞※２

三角ロジックとは，イギリスの分析哲学者スティーブン・トゥルミンが提唱した議論分析のためのモデルを基にした「主張」「事実」「理由付け」の三つの要素による論理である。ここでは自分の「考え（意見）」が文章のどの叙述を「根拠」としていて，なぜこの二つが結び付くのか「理由付け」て説明することとする。

書き手の意図を考えることについては，論説文「平和を築く」の出典と教科書本文の読み比べを行った。多くの異同に気付いた生徒は，中学生を読み手として設定したために意図的に書きかえられたのだと気付いた。複数の教材を読むことで，一つの教材を読んだだけでは気付かないことに気付くことができることを生徒は実感した。本単元でも「おくのほそ道」の教科書以外の章段を読むことで，新たな気付きを促したい。

生徒の古典に関する学習歴は以下のとおりである。

生徒は，一年時に日本最古の物語「竹取物語」と中国の故事成語を古典の導入として学習している。また二年時には，「平家物語」「漢詩の世界」を「読むこと」の単元で，「枕草子」「徒然草」を読書単元として学習している。「平家物語」「漢詩の世界」では，音読を中心としながらも大意を知り，さらに叙述に表れた人物のものの考え方や生き方について考えた。三年時には，「和歌の世界」で，教科書教材に加え「歌合わせ」を学習しており，音の響き，句切れ，表現技法（係り結び，倒置）などの観点を基に作品を批評することを通して，和歌に表現されている情景や心情の理解を深めた。また音読によりリズムやことばの選択のよさを感じることに加え，五七調や七五調を意識させ，句切れによる表現効果を考えたり，それぞれの歌を理解する上で必要な当時の風習（通い婚，夜の概念，和歌の役割など）について興味・関心をもって聞いたりした。

（３）指導の構想

以上のことから次のような手立てを講じる。

①　学習形態等を工夫した音読学習を位置付ける

古典学習の楽しみの一つに，声に出して読むおもしろさがある。しかし半分以上の生徒が，古典の文章を音読したり暗唱したりすることは難しいと考えている。このことから，個人での音読だけでなく，学習グループや全体による音読学習を位置付ける。習熟の段階に応じて分量や学習形態，音読の仕方を工夫し，生徒が飽きずに楽しみながら繰り返し学習できるようにする。こうすることで，歴史的仮名遣いや間合い，漢文調のリズム等を自然に身に付けさせたい。

ただし仮名遣いについては，本単元が中学校における最後の古典学習となることから，最初から教師が範読して教えることはしない。最初は個で仮名遣いを直す作業を入れる。いくつ直す必要があるかを示したり，既有の知識を基にさせたりして取り組ませる。これにより生徒は仮名遣いに対する自分の力を把握して，教師の範読を聞くことになる。その後，様々な形態で繰り返し声に出して読ませる。繰り返し音読することで，生徒は話のおおよその内容も把握できる。

②　単元を貫く目的意識をもたせるために課題設定を工夫する

本時では，教材以外の章段を重ねて読む学習を位置付けるが，何のためにこの学習をするのか生徒に自覚させる必要がある。そのために導入段階で，「もしも希望がかなうとしたら，どこに行って何をしたいか」と問う。生徒は，自分の興味や趣味，将来の夢などを目的や理由に挙げ，関連する土地に行きたいと答えるだろう。その上で「月日は」を読ませる。生徒は芭蕉と自分とを比較しながら読み，共通点や相違点を見いだす。そして芭蕉が「死を覚悟してまでも旅に出たのは，なぜだろうか」という疑問をもつ。この疑問を単元を貫く課題として取り組ませる。「月日は」の叙述から「人生は旅である」「漂泊の思い」「古人へのあこがれ」に関連しているようだとは気付くが，ここでの生徒の理解はまだ表面的で浅い。

そこで「月日は」以外の章段から芭蕉が実際にどんな旅をしたのかを読み取れば，旅の目的や旅への思いを，具体的に実感を伴って理解できるのではないかという課題意識をもたせ，まず教科書教材の「平泉」を全体で扱う。そこで，芭蕉がどんな行動をし，どんな情景を見，そして何を考えたのかといった観点で読ませる。心情そのものが叙述に表れていない場合は，芭蕉の行動や情景の叙述を根拠に心情を読み取らせる。ここで，三角ロジックの手法を使わせるのである。「平泉」で学習したこの読み方は，教科書以外の章段を読む際に活用させる。

次に教科書以外の章段として，「旅立ち」「遊行柳」「白川の関」「大垣」から個人で一つの章段を選択させ読ませる。個人で読み取ったことを，同じ章段を選んだグループ内で交流したりグループで共有したものを学級全体で発表させる。最後にその過程で新たに気付いたことも取り入れながら，芭蕉の生き方について文章に記述させる。これにより，生徒は旅に寄せる芭蕉のものの見方・考え方に対する理解を深め，芭蕉の生き方について自分の考えをもち，まとめることができる。

③　ねらいに沿った学習形態を工夫する

単元を通じて，音読以外でもねらいに沿って学習形態を工夫する。基本的には，まず個人で考えさせ，次に仲間と交流させ，最後にもう一度個に戻ってじっくり考えさせるという流れとする。

教科書教材では全員が同じ課題に取り組むため，普段の学習グループでの交流や全体での交流，フリー交流を適宜入れる。その後の選択課題では，個人の後は同じ課題を選択した仲間とグループを組んで交流させる。自分が読んでいない章段については，交流して考えを広げることはできるが深めることは難しいため，全体で発表を聞くという形態とする。このようにねらいに沿って学習形態を工夫することで，生徒は考えを広げたり深めたりできる。

④　学習の記録としてワークシートを工夫する

単元の導入時から終末時までの芭蕉に関する情報を一枚にまとめる「芭蕉マップ」を用いる。導入時の生徒の既知の情報は，「江戸時代」「おくのほそ道」「俳句」程度であろう。毎時間ごとに新たに知り得た情報をどんどんマップに書き加えていくようにする。特に教科書の資料や「月日は」は，教師が板書した内容をノートに写すという従来の形式をとらず，各自が読み取った情報をマップにキーワードで書いたり，それぞれの情報を関連付けたり，自分と比較したりさせる。従ってこのマップは，整理した情報を書くのではなく，情報を整理するために書く素材集のような役割をもつ。教科書以外の四つの章段は生徒にとって初見の文章であるにもかかわらず，ある程度の分量を読ませる。生徒の負担感，抵抗感は非常に大きいだろう。そのための配慮としてワークシートを工夫する。一つ目は，教科書の文章に慣れている生徒にとって違和感のないように，教材の表記等を直しておくことだ。教科書の文章は，「新編日本古典文学全集」（小学館）によっているが，中学三年生向けに表記等を変えている。本単元で用いる教材もそのようにする。二つ目は，上段に原文，下段に口語訳を配置したワークシートを用意することだ。口語訳すべてを提示することはせず，一部を空欄や選択肢にする。原文と比べたり，古語辞典を引いたりして生徒が自ら読み取ったという実感をもつことができる。

グループの交流の際には，後で行う発表や文章で記述する際に役立つように，本文を拡大した記録用紙を用いる。また芭蕉の思いをまとめる際には，叙述を根拠として理由付け，解釈させる。そのために「芭蕉の思い」「根拠としての叙述」「理由付け」を分けて記述するワークシートを用意する。三角ロジックが成り立つように記述させることで，生徒が根拠をもって考えを述べることができる。

５　単元の指導計画　（全６時間　本時　５／６）

次 (時)	○学習のねらい ・主な学習活動	評価の観点			
		関	読	言	具体的な内容
一次 （２）	○　「おくのほそ道」行程図のページを読み，時代背景や作者，作品について知る。 ・教科書の解説文から，時代背景や作者について確認する。 ・「おくのほそ道」行程図から，旅の行程や期間を確認する。	○		○	・歴史的背景や作者の状況をワークシート（芭蕉マップ）にまとめている。　【関・言】
	○　自分と比較しながら「月日は」を読み，単元の課題を設定する。 ・歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して正しく音読する。 ・口語訳を参考にし，作者の旅立ちへの思いや経緯，準備をまとめる。 ・自分と比較し，単元の課題を設定する。	○	○	○	・進んで音読し，正しくすらすら音読することができる。　【関・言】 ・口語訳を参考にし，芭蕉の旅立ちへの思いや経緯，準備をマップやワークシートに記述している。　【読】 ・芭蕉の旅への思いを課題に設定している。【読】

二次 (1.5)	○　「平泉」の章段を読み，作者の行動や情景の叙述を根拠に心情を読み取る。 ・歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して正しく音読する。 ・注釈を参考にし，平泉での作者の行動，情景を根拠に心情を三角ロジックを用いてまとめる。 ・読み取った心情を「漂泊への思い」「古人への思い」「不変なるものへの思い」と関連付ける。	○	○	○	・ふさわしい間合いや声の調子で，正しくすらすら音読することができる。　【関・言】 ・芭蕉の心情を経歴や「春望」などと関連させて三角ロジックを組んでワークシートに記述している。　【読】 ・読み取った心情を「漂泊への思い」「古人への思い」「不変なるものへの思い」と関連付けて説明できる。　【読】
三次 (2.5) 本時	○　教科書以外の四つの章段から一つを選んで重ねて読み，芭蕉の旅への思いを理解する。 ・歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して正しく音読する。 ・原文と比べたり，古語辞典を引いたりして口語訳を完成させる。 ・同じ章段を選んだ仲間とグループを組み，芭蕉の心情を交流する。 ・全体で発表し合い，他の章段での芭蕉の心情を知る。 ・自分がとらえた芭蕉の旅への思いや旅の目的を根拠を明らかにして文章にまとめる。	○	○	○	・初見の文章の歴史的仮名遣いを正しく現代仮名遣いに直して読もうとしている。【関・言】 ・新たな情報を「芭蕉マップ」に付け加えている。　【関・読・言】 ・芭蕉の旅への思いを古文の一節を引用するなどして根拠を明らかにして，文章に記述している。　【読・言】

５　本時の学習　（５／６時）

（１）ねらい

叙述を基に読み取った芭蕉の心情を交流したり他のグループの発表を聞いたりすることを通して，深めた芭蕉の心情を自分なりに記述することができる。

（２）本時の構想

①　単元を貫く問題意識をもたせるために課題設定を工夫する

本時では，教材以外の章段，「旅立ち」「遊行柳」「白川の関」「大垣」から個人で一つの章段を選択させ重ねて読む学習を位置付けるが，まず導入時にこれまでの学習と生徒の思考の流れを確認し，本時のねらいや見通しをしっかりもたせる。「冒頭…月日は」「平泉」では，芭蕉の「漂泊への思い」「古人への思い」「不変なるものへの思い」が読み取れた。

前時では，他の章段でも芭蕉の思いは同じか，同じだとした場合はどのように表れているのかを考えながら，個人で読み取らせた。

本時では，同じ章段の仲間と交流したり他のグループの発表を聞いたりして，芭蕉の心情を多面的に読み取らせていく。そして，最後に自分の考えを記述させる。そうすることで，次時には，単元を貫く疑問である「芭蕉が死を覚悟してまでも旅に出たのはなぜだろうか」という旅への思いの理解につながっていくであろう。単元を貫く疑問を解決していくための本時であることを導入時に確認する。

次に，個人がもっている交流の目的を確認する。個人で読み取った芭蕉の心情に自信がない生徒は，仲間が自分と同じかどうか確かめたいと考える。心情は読み取れたが根拠が明確でな

い生徒は，根拠や理由付けを明確にしたいと考える。根拠を明確にして芭蕉の心情を読み取った生徒は，他にも根拠はあるか，自分と全く違う心情を読み取った仲間がいるのかを知りたいと考える。前時の「振り返り」で，どのような目的で自分は交流したいと思うかを書かせておき，その目的が達成できるように意図的にグループを組む。

② ねらいに沿った学習形態を工夫する

本時は，グループ，全体，個人という順に学習形態を変えていく。グループとは，同じ章段を選んだグループであり，その中で個人で読み取ったことを交流させる。交流は前半と後半に分け，交流の視点を変える。前半は，「芭蕉がどんな行動をし，どんな情景を見，そして何を考えたのか」といった視点を与え，後半は，「前半に読み取った芭蕉の心情が，『冒頭…月日は』『平泉』で共有した『漂泊への思い』『古人への思い』『不変なるものへの思い』とどう関連するか」という視点を与えて交流させる。

次の全体では，グループで共有したものを学級全体で発表し合わせる。他のグループの発表を聞く際には，「自分たちと共通しているところと違うところはどんなことか」という視点で聞き取らせ，自分たちが気付かなかった芭蕉の心情に気付かせ，確認させていく。すると「旅立ち」では，死を覚悟していたとはいえ押さえ切れない心細さや不安，あるいは親しい人ともう二度と会えないのだと泣きながら別れる辛さ。「遊行柳」「白川の関」では，あこがれの古人ゆかりの地に来た感動やいよいよ未知の東北に足を踏み入れるのだという覚悟。「大垣」では，まさか生きて再び会うことはあるまいと思っていた親しい人との再会の喜びや新たな旅立ちの決意。このような芭蕉の心情・思いに段々と生徒は気付いていくであろう。

最後の個人で学習する場面では，本時を振り返らせながら，交流や発表を通して深まった芭蕉の心情をワークシートに記述する形でまとめさせていく。

③ 学習の記録としてワークシートを工夫する

前時では，しっかりと理由付けられなくてもよいので，叙述を根拠に個人が予想した芭蕉の心情を短冊に書かせ，ワークシートの叙述にはサイドラインを引かせておく。グループで交流する際には，本文を拡大した大きな記録用紙をグループに１枚用意し，それを囲みながら，根拠となる叙述にサイドラインを引き，心情をキーワードで書いた短冊を外側に貼っていかせる。理由付けは，サイドラインと短冊を結ぶ線の脇や，紙の余白に書き込ませていく。こうすることで，生徒は自分の思考の流れを整理して発表することができるし，他の友達の考えをビジュアルで確認しながら話し合うこともできる。また，最後に個人で記述する際も，グループで話し合ったことを振り返りながらそれらを参考にしていくことができる。

全体で，他のグループの発表を聞く際には，四つの章段すべてが印刷されている個人用のワークシートを準備し，それに，根拠となる叙述にサイドラインを引いたり，新たに分かった芭蕉の心情をキーワードで記述したりしていく。

（３）展開

	生徒の学習活動と教師の働き掛け	・留意点と◇評価
導入 5分	○　前時を振り返り，本時の学習の見通しをもつ。 「芭蕉はなぜ死を覚悟してまでも旅に出たのか」を考えるために，前回は，個人で一つの章段を選んで読みました。「旅先で，芭蕉が何をしてどんな情景を見たのか」を叙述から読み取り，それを根拠として芭蕉の心情を考えました。 今回は同じ章段を読んだ仲間と交流したり，違う章段を読んだ仲間の発表を聞いたりして，芭蕉の心情を，一人で読んだ時よりも，深く読み取っていきます。 ○　本時のねらいや学習の流れを確認する。 ①　単元を貫く疑問「芭蕉はなぜ死を覚悟してまでも旅に出たのか？」について，本時で考えていく。 ②　前時までは，「冒頭…月日は」「平泉」から，芭蕉の「漂泊への思い」「古人への思い」「不変なるものへの思い」が読み取れた。 ③　前時は，他の章段でも，②で読み取れた芭蕉の思いは同じか？	・同じ章段を読んだ仲間四人または三人グループの学習班を掲示して，座席を移動させておく。 ・前時の「振り返り」から各自の交流の目的に沿うようグループを編成する。 ・生徒の思考の流れを確認し，本時のねらいや見通しをもたせる。

同じだとした場合は具体的にどのように表現されているか？を個人で読んだ。

④　本時は，同じ章段を読んだ仲間と交流したり，他の章段を読んだ仲間の発表を聞いたりして，芭蕉の心情をより深く読み取っていく。

⑤　本時の最後には，「芭蕉はなぜ死を覚悟してまでも旅に出たのか？」という疑問に対して，自分なりに根拠を挙げて具体的に説明できるようにする。

・前時までのマップやワークシートを見ながら聞く

展開①　20分

○　同じ章段を読んだ仲間とグループを組み，芭蕉の行動や情景の叙述を根拠に，芭蕉の心情を交流する。

芭蕉の行動や情景の叙述を根拠に，個人で読み取った芭蕉の心情を交流しなさい。

・各自が読み取った旅先の地での芭蕉の行動や情景の叙述を根拠に，芭蕉の心情を交流する。

・必要な場合は理由付けをして心情を説明する。

	根拠となる叙述（行動・情景）	芭蕉の心情
A 旅立ち	・またいつかはと心細し ・前途三千里の思ひ胸にふさがりて，幻のちまたに離別の泪をそそぐ ・行く道なほ進まず ・むつましきかぎりは宵よりつどひて，舟に乗て送る。 ・人々は途中に立ち並びて，後かげの見ゆるまではと見送るなるべし。 ・「行く春や鳥啼き魚の目は泪」	・死を覚悟していもやはり心細いなぁ。 ・いよいよ一世一代の大変な旅に出る。不安だ。 ・親しい人と別れるのはとても辛い。 ・春が行ってしまうのを鳥も魚も泣いて悲しむ→春と共に自分も旅立つ。別れはつらい。みんな泣いている。
B 遊行柳	・この所の郡守戸部某のこの柳見せばやなど，折ゝにの給ひ聞え給ふを ・今日この柳のかげにこそ立より侍つれ ・「田一枚植て立去る柳かな」	・知人にぜひここに行ってと何度も勧められていたから，とても楽しみだ。 ・ついに，西行の柳を見に来た！と感動した。あこがれの西行に近付けて嬉しい。 ・西行のまねをしよう。 →もう二度と来られないなぁ。 →あこがれの地に立てた感動
C 白河の関	・心もとなき日数重ねるままに、白河の関にかかりて，旅心定まりぬ。 ・いかで都へと便り求しも断りなり。 ・中にもこの関は三関の一にして，風騒の人，心をとどむ。 ・青葉の梢なほあはれなり ・卯の花の白妙に茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。	・未知の東北の旅は不安で落ち着かない日々だったけれど，白川の関まで来てやっと心が決まった。 ・自分も江戸の人たちと手紙のやりとりをしたいなぁ。でももう無理だろうなぁ。 ・さすがに多くの古人が歌に詠んでいるだけあって，すばらしい所だなぁ。 ・青葉の梢は趣があるなぁ。 ・白い花がたくさん咲いてい

・交流のねらいや見通しをもたせる。

・本文を大洋紙の半分のサイズに拡大した用紙を配付する。

・読み取った芭蕉の心情を色短冊に書く。

・根拠となる叙述にサイドラインを引く。

・必要な場合は理由付けもする。

・発表の仕方のモデルを示す。
①ここでの芭蕉の心情は～だと思います。
②その根拠はここです。（線を引く）
③（もし～でないなら）～　からです。
（必要な場合は理由付けもする）

・進行役は質問しながら，発表役の言いたいことを確かめたり，不足している情報を引き出したりすることを確認する。

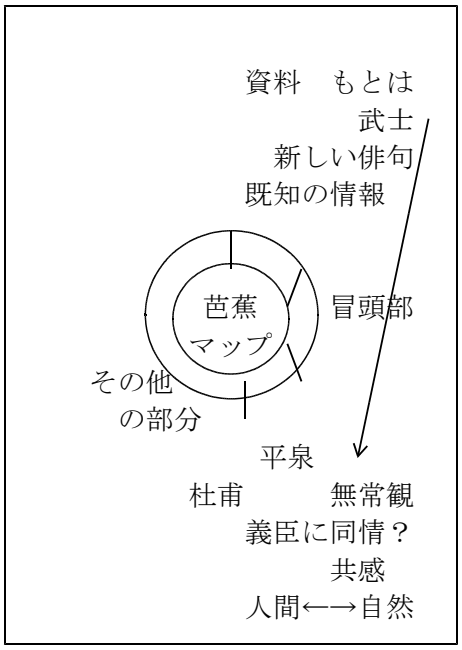
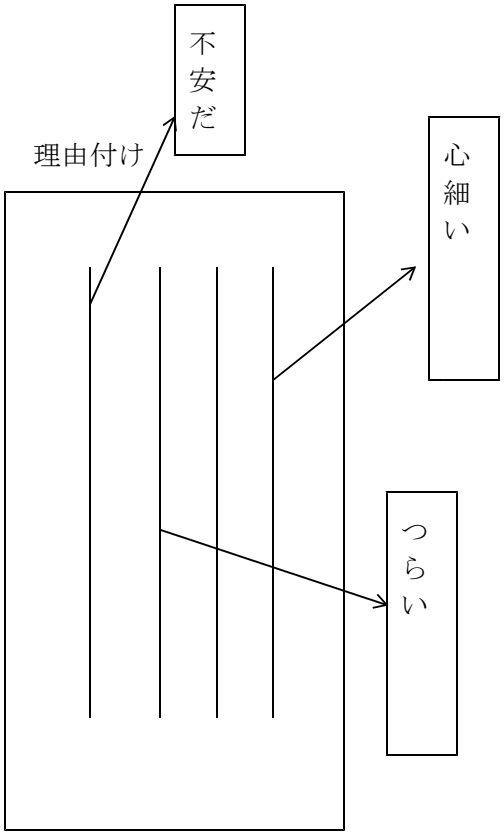
・ある根拠についての解釈が分かれている場合は，必要に応じて教師が助言する。

・役割は途中で交代する。

			て雪の中を歩いているみたいにきれいだなぁ。	
	D 大垣	・駒に助けられて ・親しき人々日夜とぶらひて蘇生のものにあふがごとくかつ悦び，かついたはる。 ・旅の物うさもいまだやまざるに ・「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」	・もう歩けないほど疲れたなぁ。 ・まさか生きてまた会えるとは思っていなかったのに，再会できてとても嬉しい。 ・まだ旅の疲れもとれないが，また次の旅に出たい。 ・蛤の蓋と身が引き剥がれるようなつらい思いを残し，親しい人々と別れて，自分は今，行く秋とともに伊勢の二見に向けてまた旅に出るのだ。	◇評価 自分の考えの根拠や理由付けを明らかにしたり，複数の根拠をワークシートに記述したりしている。 A　新たな芭蕉の心情をワークシートに記述している。
展開② 15分	○　他のグループの発表から，自分たちが気付かなかった芭蕉の心情に気付く。 他のグループの発表から，自分たちと共通するところと違うところを聞き取り，新たに気付いた芭蕉の心情をワークシートに書きなさい。 ・展開①の記録用紙を提示し発表する。 ・一つのグループが発表した後で，同じ章段を選んだ別のグループが付け足す。 ・他のグループの発表を聞き，その章段のワークシートに芭蕉の心情を記述したり，その根拠となる叙述にサイドラインを引いたりする。			・生徒の発言を復唱したり，質問して確かめたり，価値付けて，整理する。 ◇評価 新たな芭蕉の心情をワークシートに記述している。
展開③ 8分	○　交流や発表を通して，自分が最も感銘を受けた芭蕉の心情を記述する。 今日の学習で分かった芭蕉の心情をワークシートにまとめなさい。 例　【A 旅立ち】を読んで ＊初めに自分で読み取った（予想・想像した）芭蕉の心情は，「死を覚悟していたとは言うものの，やはり行ったことのない未知の世界に旅立つのは心細い。不安だ。それに親しい人と別れるのはとても辛い。」というものだった。 ＊次に仲間の意見を聞いて，「ついにあこがれの西行ゆかりの柳を見ることができた！感動した。」という心情もあったと新たにわかった。 ＊特に自分が感銘を受けた（そうだったのか！と思った）芭蕉の心情は，「あこがれの人にゆかりのあるところに来て，自分もいい作品を作りたい。」というものだ。			・書き方のフォーマットを示してあるワークシートを配付する。（左の例の下線部） ・書き終わった生徒には，感銘を受けた理由も書かせる ・ワークシートを集めておき，後で評価する。
まとめ 2分	○　次時の学習内容を知る。 次回は，「芭蕉はなぜ死を覚悟してまでも旅に出たのか」芭蕉の旅への思いを文章にまとめ，全体で交流します。			・ワークシートの「振り返り」について挙手させる。

＜ワークシート構想＞

①【芭蕉の思い・心情】（自分の予想・考えを書く）
この時，芭蕉は，自然に比べてなんと人間の営みははかないのだろうと思っていただろう。

③【理由付け】（①と②がつながることを説明する）
「長い間涙を落として座っていた」ということは，何かにジーンとして悲しかったからだ。目の前の「草むら」をずっと見つめながら，杜甫の「春望」を思い出していたのだから，杜甫と同じような気持ちになったはずだ。

②【証拠となる叙述】（芭蕉の行動，情景，心情を本文から抜きだす）
行動→　国破れて・・・時のうつるまで、なみだを落とし侍りぬ。 杜甫の「春望」を引用
情景→　高館からの平泉の眺め　特に「草村」